

正直なところ、この本のあとがきを書く時が来ようとは思っていなかった。本書は執筆者である若いロシア文化研究者たちの旺盛な意欲と、いくつかの偶然的賜物である。

まえがきに述べられているように、ソ連崩壊二〇年を機にロシアをもう一度考えてみようというのが本書の目的であった。たしかに、一言でソ連崩壊二〇年といっても、九〇年代と〇〇年代ではまったくといっていいほど様相を異にしているし、IT革命、グローバル化など世界規模の要因がロシアを変貌させたことも忘れるべきではない。企画に参加した若手、中堅の、多くは無名の研究者たちは、ソ連崩壊後のロシアの歩みに寄り添い、おのおのの論件と向き合ってきた。その成果がここに問われている。

二〇一〇年夏から二〇一一年春にかけて書かれたこれらの原稿を読んで気づくことがいくつかある。

その一つはソ連崩壊以後の二〇年で消費文化がロシアに根づいたことである。一度消費というものの味を知ってしまったロシア人は、もはや「能力に応じて働き、労働に応じて受けとる」というつましやかな生活原理に戻ることはないだろう。それに関連するが、もう一つの視点は、イデオロギーの交代が定着したことである。マルクス・レーニン主義は今日何の意味もたず、そのアイデンティティを担保するものとして、ロシア正教の影響力は他の追随を許さない。

だが、それが絶対かという点、問題は簡単ではないようだ。きらびやかで押しつけがましいロシア正教の過剰な演出にたいして、国民はいささかうんざりしているように見える。この点は、プーチンの長期政権にたいする倦怠感ともオーバーラップしている。とはいえ、イデオロギーの押し売りも、長期にわたる独裁的な政権も、わずかな長所だけを見つめてじっと我慢するほかないと、ロシア人は意外にかんたんに達観してしまう気もする。ロシアの歴史において、政治の混乱によって民が被ったはかり知れない傷手を癒してきたのは、つねに母なるロシアの大地であった。ロシア人にはまだ逃げこむ場所が残されているようだ。

さて、本書の執筆陣は所期の目的をどれほど達成できただろうか。広い視野と豊富な経験が必要なこうした本の編者として、私たち編集チームがその資格と実力を備えていたと言いがたい。しかしながら、執筆者たちの原稿を読んでそれを世に問う価値は十分にあると考えている。

編集活動中の最大の事件は、やはり東日本大震災であった。編者の野中、三浦、井上、東洋書店編集者の岩田が最初の編集会議を開いたのが、二〇一一年三月一日埼玉大学だった。異変が起こったのは、編集作業のただ中である。この震災の混乱のなかで、企画が立ち消えになってもおかしくはなかった。

ところが、編集チームが執筆者の安否を確認する過程で、じつに思いがけなく被災地東北から、予定どおりソ連崩壊満二〇年となる二〇一一年一月に本書を上梓しようという声があがった。埼玉三郷市の倉庫が被災していた東洋書店も、年内の刊行をあきらめなかった。ある程度状況が落ち着いた三月下旬から編集会議を再開させ、執筆者たちに改稿に取り組んでもらい、語釈と図版を

調べ、あとがきを書くところまでたどりついた。ほっと一息と言いたところだが、震災で不幸にもお亡くなりになられた方々、避難生活を余儀なくされている方々を思うと、胸がつかまる。

本書の刊行には、多くの方々から助力をいただいている。企画の立案にかんしては、堀江耕氏が適切な助言をくださった。図版の提供とその構成について、田代雅章氏（株式会社J・S・N）、宮本立江氏、堀江広行氏、スヴェトラナ・フォードロヴァ氏のご協力を得ることができた。索引の作成は、渡辺圭氏が担当してくださった。そして、東洋書店の編集者、岩田悟さんには、クレバーな第一読者として私たちの企画を終始一貫支持していただいた。末筆ながら、みなさまに心から御礼申し上げます。

なお、本企画は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「ロシア文化論の研究——制度化の諸相と脱中心化の可能性」（課題番号 23320065）の支援を受けている。

二〇二一年一月

編集チーム 三浦清美